Culture

産業遺産の魅力を撮る

先人の生きた証し残す

「両側に広がるウイングがすてき。ここが一番です」。神戸市から来た前畑温子さん(三二)が熱く語る。見つめる先は市民らの手で守られている旧国鉄の中央西線の廃線跡、愛岐トンネル群入り口から約一・七キロ先の6号トンネル多治見口。愛知県春日井市と岐阜県多治見市のちょうど境にある。全部で十四のトンネル（現存は十三）の翼壁は皆違うらしい。

NPO法人愛岐トンネル群保存再生委員会の村上真善事務局長が「トンネルの中に生えたツバキが初めて花を付けたよ」と案内する。「三年前より大きくなりましたねえ」と喜ぶ前畑さん。一九〇〇年に開通した同トンネルは六六年の廃線後、やぶの中に眠り続け、約四十年後、その一部に村上さんらが日を当てた。前畑さんは「公開する場合、歩きやすいよう木を切ったり、舗装したりするけれど、こはバラスト（線路上の石）も残す。『生えている木も石もこのトンネルの歴史だから残すんだよ』なんて話を聞いて、この場所も村上さんも大好きになったんです」とほほ笑む。

彼女は、産業遺産写真家兼探検家。二十四歳から八年で全国約五百カ所以上を回る。今どき産業遺産女子とでもいうのだろうか。でも単に見た目にはまるだけではない。先人たちが生きた証しを知る喜びと、守る責任を実感し、行動に変えていった。

最初は廃虚マニアだった。

上年月で変化した壁が大好き。ひびやすすを見つめる前畑温子さん　下トンネルの中に生えるツバキを前に村上真善さんと話す前畑さん＝いずれも愛知県春日井市の愛岐トンネル群で

文化 ぶんぶん人類学

人との出会いも宝

保育士だった八年前、書店で偶然手を伸ばした廃虚の写真集に一目ぼれ。趣味のカメラ仲間に廃虚への関心を話すと、「よく行ってるで」。まさに運命！と同行を頼み込んだ。

地域も職業もさまざまな人たちと、毎週のように〝勝手に〟楽しく廃虚を回った。一年ほどしたころ、お目当ての兵庫県の建物が解体されていて代わりに寄った近くの明延鉱山でガイドの一言に目が覚めた。「君らみたいな若い子が勝手に入ってしまうんで、なくなってしまうこともあるんよ」。廃虚マニアが詰め掛ける事態に驚いた所有者が事故を恐れて解体してしまったと知った。ショックだった。

適切に許可を取り、皆が訪ねられる仕組みをつくろう。すぐに仲間十人で、NPO法人「J-heritage（ジェイ・ヘリテージ）」を立ち上げた。産業遺産を記録し、魅力を知るツアーを企画する。二十六歳でNPO代表の洋平さん(三七)と結婚。産業遺産巡りを続けた。

訪ねた産業遺産のガイドたちが「持って帰り」とくれるという石炭や石

最初は被写体としての建物の魅力にひかれたが、ガイドや地元の人と出会い話を聞いて、明治の人たちがどんな生活と仕事をしていたか、教科書では分からない世界を身近に感じた。歴史の勉強は大の苦手でも、先人たちの魅力に夢中になった。

二年前、保育士を退職した。長崎・軍艦島の尊敬するガイドに「ここは未来の日本の姿かもしれないよ」と言われ〝本気〟になった。自分ができるのは写真。産業遺産をできるだけ記録し伝えようと決めた。二〇一四年出版の『女子的産業遺産探検』（創元社）は話題になり、講演に呼ばれることも増えた。

産業遺産や人と出会い、いつも自信がなかった自分が大きく変わったと感じている。「今は何でも挑戦してやろうと思ってます」。地域の古いものの良さを見つけ出していくワークショップもNPOで始めた。「古いものの魅力と人と土地を知って地域を好きになる。皆が変われば、すてきな場所が全国にどんどん増えると思うんです」。彼女の探検に終わりはなさそうだ。

（野村由美子）

※愛岐トンネル群は、二十六日から五月一日の六日間、午前九時半から午後三時（入場は二時まで）の間、特別公開される。

ヒトモノ

「コンクリートの壁も大好き！　いろんな模様を見つけたりして」と〝壁愛〟が止まらない前畑さんに対抗するわけではありませんが、私は愛岐トンネル群で、わずかな光に反射するぬれた壁にグッときました。前畑さんの愛は、出会う人の心も動かすのでしょう。地元の人に石炭や石などもよくいただくそうです。

160415中日新聞　産業遺産 Jヘリテージ

大里局（愛知）　消印に刻まれた風景　古沢　保